



局所～長距離構造制御に立脚した イオン交換吸着における親和性の起源解明

簾 智仁

信州大学 先鋭材料研究所

キーワード：層状複水酸化物(LDHs)，イオン交換，原子配列

1. 背景と研究目的

層状複水酸化物(LDHs)は、一般式 $[M^{2+}_{1-x}M^{3+}_x(OH)_2] [A^{n-}_{x/n} \cdot yH_2O]$ で表される層状無機化合物である。古くからアニオンの吸着材として注目されている。ほとんどの場合、 $CO_3^{2-} > HPO_4^{2-} > SO_4^{2-} > OH^- > F^- > Cl^- > Br^- > NO_3^- > I^-$ の序列となる(宮田, 1983年)⁽¹⁾。この序列を眺めると、親和性の因子はクーロン相互作用が主であると予測できるが、例えば、フッ化物イオンを硫酸イオンを含む水溶液中から選択的に除去するためには、ファンデルワールス力や水素結合、立体相互作用のような比較的短距離的で弱い相互作用を積極的に導入しなければならない。材料合成の観点では、このような相互作用を制御することは、ある程度決まった結晶構造中に含まれる複数の原子の配置を制御することに他ならない。LDHsは金属水酸化物層を基本骨格とし、金属イオンを中心として水酸化物イオンが配位した正八面体が互いに稜共有することで層を形成している。多くの場合、金属イオンは二価および三価の異なる元素からなり、三価の金属イオンが陰イオンの吸着サイトを提供する。つまり、水酸化物層を構成する二価/三価の金属イオン組成比やその配列が陰イオンの相互作用を決める。

イオン半径の大きな硫酸イオンに対して、反対にイオン半径の小さいフッ化物イオンを選択的に吸着するには、硫酸イオン間に立体障害を生じるような金属イオンの原子配列が実現できれば良い。つまり、三価の金属イオンが互いに隣り合うようなドメインを基本層内に構築できれば良い。その最も簡単な方法は三価の金属イオン組成比を増加することであろう。しかし、一般的なLDHsの合成法である沈殿法では、三価の金属イオンの組成比が高くなるほど、ホスト層の三価金属イオン同士の静電反発によりLDHs相が構造が不安定になるため、 $x = 0.33$ 以上の組成のLDHsを得ることは困難であった。我々はこれまでに、LDHsと母構造が類似した層状酸化物塩($Na[M_{1-x}M_2]O_2$)に対して、酸化・還元処理を施すことで、トポケミカルにLDHsを得ることに成功している。本手法でLDHsの前駆体として用いる層状酸化物塩は、同じ価数をもつ二種類以上の金属イオンを酸化物層中に含む。そのため、従来のLDHsの生成過程で生じる特定の金属イオン同士の静電反発を抑制し、より高い含有率 x をもつLDHsを得ることが期待できる。

本測定では、NiとFeからなるLDHsについて、FeおよびNiのK吸収端のX線吸収微細構造(XAFS)スペクトルの取得を実施しその動径分布関数を得た。

2. 実験内容

$x = Fe/(Ni+Fe)$ 比の異なる組成のNi/Fe LDHsを固相法により作製し、酸化還元処理を繰り返すことでトポケミカル反応によりLDHsを得た。得られたLDHs試料を窒化ホウ素粉末と任意の割合で混合し、測定用のペレットを作製した。作製したペレットを用いてFeおよびNiのK吸収端のXAFSスペクトルをビームラインBL5S1にて取得した(測定代行)。

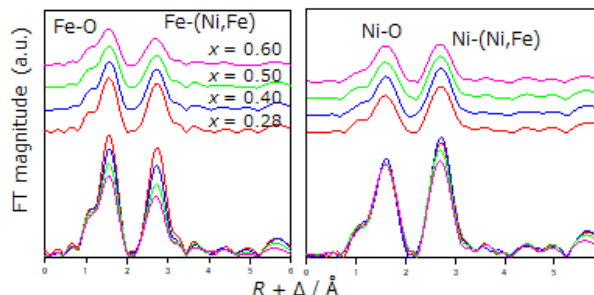


図. トポケミカル法により作製したNi/Fe LDHsのFe(左)およびNi(右)を中心とした動径分布関数(RDF)

3. 結果および考察

Fe および Ni 原子を中心とする動径分布関数(フーリエ変換の k 範囲 : $2.8\sim 11.5 \text{ \AA}^{-1}$)から, 両原子の周囲の配位環境は Fe 組成比の増加に伴って M-M (M=Fe, Ni)間距離に対応するピークの強度が相対的に減少し, この傾向は Fe 原子の配位環境においてより顕著であった (右図)。今後, X 線結晶構造解析を通して, この原子配列について詳細に調査を進めていく。

4. 参考文献

Miyata, S. Anion-exchange Properties of hydrotalcite-like Compounds. *Clays Clay Miner.*, **1983**, 31 (4), 305–311.